

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.001-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

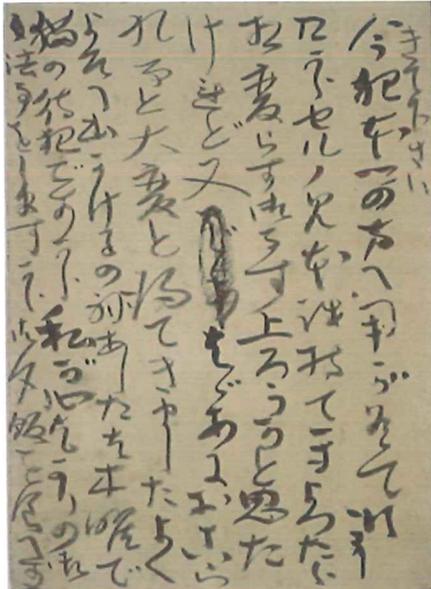
ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

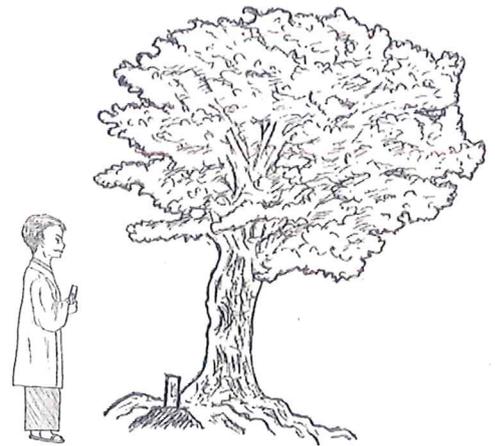
■資料名：夏目鏡子発小宮宛書簡（はがき）「猫の法事」案内通知（小宮豊隆資料〔追加分〕から）

■資料のひとことPR: 漱石は猫の葬式だけでなく、法事も造墓もちゃんとやるケアの達人だった！ことが分かる資料

■資料写真：該当ハガキ裏面（通信欄）



きて下さい
今夜本郷の方へ用を可有って行まし
た可ラセルの見本越持一寸よつたら
相変わらす御るす上ろう可と思た
け連ど又者にお古ら
れると大変と帰つてきましたよく
よそへ出かけるの祢あした木曜で
猫の待夜です可私可心者可りの御
法事をします可ラ御夕飯を食へずに



◀夏目鏡子発小宮宛書簡（はがき）
上は同文翻刻

▲桜の木の下の小さな墓標には漱石が
「この下に稲妻起る宵あらん」と弔句
を認めた（イメージ/イラストは担当者）

■資料データ File

- ・形状/材質/法量：ハガキ（旧逓信省発行官製はがき・1銭5厘/中厚紙/タテ14cm*ヨコ9cm）
- ・制作年代/時代背景：大正元（1912）年9月11日/明治が終わり、漱石は『こころ』を着想していた
- ・注目ポイント：鏡子夫人が「猫の法事」を呼びかけたハガキは、今回の作業ではじめて発見されたものです

■資料メモ

漱石のデビュー作にしてヒット作『吾輩は猫である』のモデルとなった夏目家の猫は当初、招かれざる客として特に猫嫌いの鏡子夫人から目の敵にされていました。しかし漱石の「置いてやったらいいじゃないか」と、夏目家出入りの按摩さんの「この猫は福猫ですよ」のひとことで一転「アイドル」となり（それでも名前がつくことはなかった）、俄然存在感を増してゆきます。

猫が福猫だったことは、その後の漱石作品のヒットで証明されましたが、その猫も明治44年9月13日に死去。夏目家ではこれを悼み、漱石が猫の訃報を出したことは有名ですが、その後も本資料にあるように法事を営み、最後には造墓・弔句・供養塔（猫塚）を造るなど、猫への愛情と感謝が徹底していたことが分かります。

■整理担当者のつがやき

猫嫌いだっただ鏡子夫人が、このハガキで分かるように、最後は猫の法事の施主（主催者）になっています。供養される猫が「人間とはこんなものなのデアル」と思ったのかどうか、できるものなら漱石に「猫」の続編の中で語らせてもらいたかったです。

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思い出』文芸春秋社刊（文春文庫）1994年
 - ・香日ゆら著『先生と僕 -夏目漱石を囲む人々 青春篇・作家編-』河出書房新社刊 2018年
 - ・新宿区文化産業観光部文化観光課編『ガイドブック 新宿区立漱石山房記念館』新宿区刊 平成29年
2. 本文の情報は令和3年8月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。
3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.002-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介しますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 : 阿部次郎発小宮宛書簡（ハガキ）信濃上林温泉より（小宮豊隆資料〔追加分〕から）

■資料のひとことPR: 思い出の中の先生(夏目漱石)と美しい紅葉の情景が分かる資料

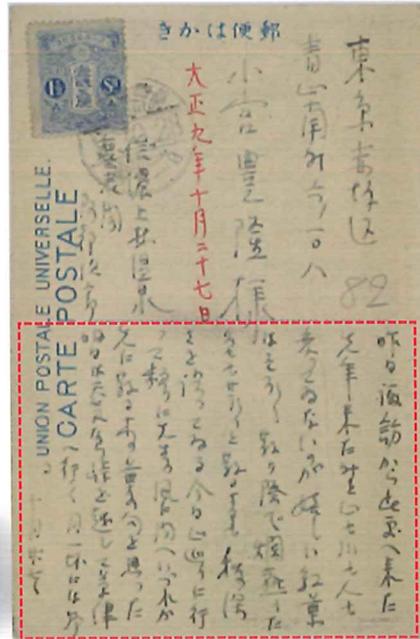
■資料写真 : 該当ハガキ表・裏面（通信欄）



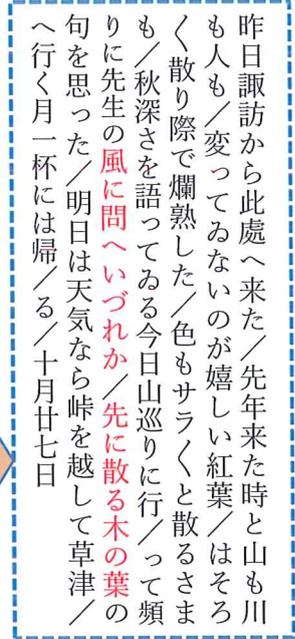
▲阿部次郎発小宮宛書簡(ハガキ)表
信州平穏温泉ノ内上林温泉ヨリ笠ヶ嶽ヲ望ム
右は同文翻刻(点線部分)

※おたすけメモ

信州平穏温泉ノ内上林温泉は、長野県下高井郡山ノ内町平穏に現在も営業中(開業100余年の老舗旅館)。笠ヶ嶽は標高1,850m。高山村の山々のなかでも人々に有名な、ひとときわ目につく山です。阿部は秋の行楽でお気に入り?のこの地を訪れた。



▲同ハガキ裏(通信欄)



▲通信文翻刻

■資料データ File

- ・形状/材質/法量 : ハガキ(旧通信省発行官製はがき・1銭5厘/中厚紙/タテ14cm*ヨコ9cm)
- ・制作年代/時代背景: 大正9(1920)年10月27日/日本最初の国勢調査実施
- ・注目ポイント : ハガキに書かれた「先生(夏目漱石)」の一句が秋の風情を物語っています

■資料メモ

阿部次郎(哲学者、『三太郎の日記』著者/1883~1959)が夏目漱石と知り合ったのは明治42(1909)年、漱石門下の一人、安倍能成の紹介によってでした。これを機に漱石門下に加わった後、小宮豊隆・安倍能成・森田草平とともに「朝日新聞文芸欄」の主要な運営メンバーとなります。

阿部と小宮の交流は年をおうごとに深まり、小宮のその後のドイツ留学は阿部の強いすすめによります。大正13(1924)年に小宮帰国後に送られた阿部の書簡には「君が帰ってきて世界が少し賑やかになったような気がする」と記されるほか、その後は東北大で同僚となり、互いを呼び捨てにする程の親交が生涯続きました。

このハガキはいわゆる旅のレポートですが、上林温泉(長野県)へ来て変わらぬ景色と人に触れ、漱石の思い出と共にゆっくりと旅を楽しんでいる様子が伺えます。以前も訪れたらしい様子から、上林温泉は阿部のお気に入りの場所のひとつだったようです。

■整理担当者のつばやき

阿部次郎は、天気恵まれ上林温泉から峠を越えて草津まで山越えを楽しんだでしょうか…? 漱石の句を思い出しながら、漱石と一緒に旅をしている、そんな姿が浮かびます。

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・香日ゆら著『先生と僕 -夏目漱石を囲む人々 青春篇- 作家編-』河出書房新社刊 2018年
- ・新宿区文化産業観光部文化観光課編『ガイドブック 新宿区立漱石山房記念館』新宿区刊 平成29年

2. 本文の情報は令和3年8月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。

3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.003-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

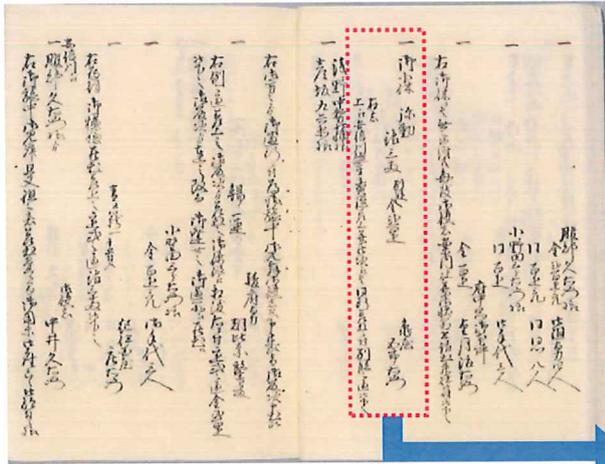
ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名：朝鮮通信使資料『對州御下向海陸日記(往路)』

■資料のひとことPR:江戸時代から現在まで続く甘味。将軍名代として緊張がつづく忠固公の旅の癒しはスイーツだった！

■資料写真：同書第28丁目 東海道中「府中宿(静岡市)」西はずれとなる「弥勒」付近の記事



『資料翻刻』

一 御小休 弥勒

銀三両

別段

金貳百疋

亀屋

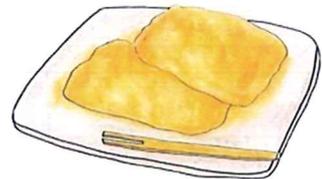
五郎右衛門

右者 上正 安倍川餅二重煮染差上并御次者同断差上候付別段之通被下之

■資料解説：小笠原忠固一行、弥勒にてひと休みの段。

左の記事は、將軍上使(名代)として、東海道を下る小笠原忠固(第6代小倉藩主)一行が、府中宿外れの「弥勒」の茶屋・亀屋で休憩した際、場所代として銀三両(約二十四万七千五百円)、差入れ(安倍川餅と煮染め)のお礼として別途金貳百疋(約三千円)を支払った記録です。

このとき亀屋の五郎右衛門は旅のなぐさめにと名物「安倍川餅」を進上。これを受け入れた忠固は、お供の人数(約二百人)の休憩代とともに、主人へチップ代わりの別料金を渡し、貴人としての余裕あるふるまいを見せたようです。セレブな旅には今も昔もチップがかかせなかったように、各地でこの地ならではの接待を受けた際、支払っています。



ついでのひとつメモ-資料理解のために「もう一言!」-

静岡名物の「安倍川餅」は、東海道を歩く旅人が安倍川の渡しで川越人足を待つ間に茶屋で供されたことが始まりとされます。別名「五文とり」とも言われ、餅ひとつの値段がおおよそ五文であったことに由来します。十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』にも、「ほどなく弥勒といへるにいたる。ここは名におふ安倍川餅の名物にて…」と、弥勒の地名や安倍川餅についての描写があります。

■資料データ File

- ・形状/材質/法量：和本(對州御下向海陸日記/和綴じ冊子/タテ 27.2 cm * ヨコ 19.8 cm * 厚さ 3 cm * 本文 230 丁)
- ・制作年代/時代背景：文化8(1811)年/ロシアの進出等でアジア情勢が緊迫、通信使はこれで最後となった。
- ・注目ポイント：本書は、貴重な善隣外交の記録として、ユネスコの「世界の記憶」遺産に登録されています。

■資料メモ

朝鮮通信使は、豊臣秀吉が朝鮮国に出兵のため途絶えた国交回復を目的に、両国の平和的な関係を再構築しようと江戸時代に始まった親善外交です。1607年~1811年までの間に12回行われ、第12回目は両国の財政難(日本では天明の大飢饉や天災等で国全体が疲弊・困窮していた)を理由に簡素化され、国書交換を対馬で行う『易地聘礼』となり、その記録が小笠原文庫に残されました。

文化8年2月19日、江戸幕府將軍(徳川家斉)の名代となった小笠原忠固は、江戸から一路聘礼の地である対馬を目指しました。江戸から駿河(静岡)へ辿り着き暫しの休息。安倍川の渡しで船待ちをしている間、のんびりと味わう『おやつ』の時は將軍名代として緊張が続く旅路に安らぎが訪れる癒しの時間だったのではないのでしょうか。

■整理担当者のつばやき

小笠原忠固公の旅先では、安倍川餅の他にも『栗粉餅』(静岡県・岩瀬での休憩時)や『求肥飴』(三重県・桑名での宿泊時)の記述があります。昔の人の足跡をたどって歩く東海道、合わせてスイーツの旅もいいなあ。

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

・朝鮮通信使使節幕府上使小笠原忠固公 對州御下向海陸日記 文化八辛未年二月十九日 至同年七月廿五日 朝鮮通信使を読む会編

・古文書ネット/江戸通貨の円換式・高精度計算サイト/フリー百科事典「ウィキペディア」

2. 本文の情報は令和4年1月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。

3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.004-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

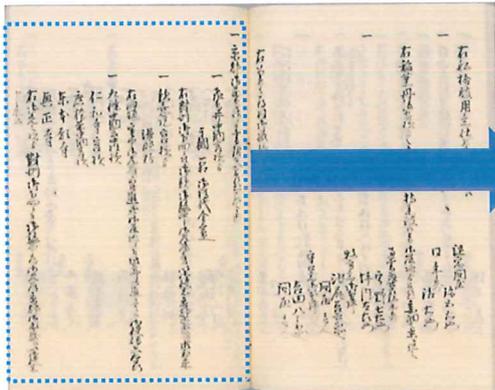
ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名：朝鮮通信使資料『對州御下向海陸日記(往路)』

■資料のひとことPR: ようやく伏見到着。これから川船でゆつくりと思ったら、お客だらけでへとへとに…

■資料写真：同書第101丁目 京都・伏見



参考：伏見名物「淀川下りの三十石船」
歌川広重「京都名所之内淀川」天保5年(1834)頃

《史料翻刻》

右の方より、對州御下向について使者を遣わされての御見舞があったとのこと。

一 京都御留守居方書付を以差出左之通

一 飛鳥井中納言様方
干鯛 一箱 御樽代金三百足

一 右對州御下向二付御飲御旅中御見舞舞方御使者京都御屋敷江御到来
歡喜心院宮様方
鱧鮓粉

一 右旧臘寒中御見舞可被進進御取込三付此節被進候由二御使僧を以右同斷
九条中納言中将様
仁和寺宮様
廣橋前中納言様
東本願寺
興正寺
右御先々様方對州御下向二付御旅中為御見舞京都御屋敷江御使者
申来候

仁和尚宮様(皇族「入道清仁親王」)
廣橋前中納言様(名門公家)
東本願寺(浄土真宗大谷派、お東の総本山)
興正寺(同じく浄土真宗興正寺派の総本山)

一、飛鳥井中納言様(名門公家)より干鯛一箱・小樽代金として金三百足(三十万円)。
對州(対馬)に向かう歓迎の使者を京都御屋敷へ遣わされてのお見舞。
一、歡喜心院宮様(皇族「入道公澄親王」)より、鱧鮓粉をいたたく。
右は昨年、寒中御見舞として用意されていたが、忙しさに取り紛れて渡し損ねたので、
今回の機会に(持参した)と、使僧を以て右同様に遣わされた由。

一、九条中納言中将様(名門公家)

仁和尚宮様(皇族「入道清仁親王」)
廣橋前中納言様(名門公家)
東本願寺(浄土真宗大谷派、お東の総本山)
興正寺(同じく浄土真宗興正寺派の総本山)

右の方より、對州御下向について使者を遣わされての御見舞があったとのこと。

■史料解説：小笠原忠固一行 伏見にて休息の時の際(閏2月4日)の御御役(秘書)メモの意訳
一、京都の当藩(小倉藩)留守居役(現地滞在員)から左記の方々より道中見舞があった旨
報告あり。

■資料データ File

- ・形状/材質/法量：和本(對州御下向海陸日記/和綴り冊子/タテ 27.2 cm * ヨコ 19.8 cm * 厚さ 3 cm * 本文 230 丁)
- ・制作年代/時代背景：文化8(1811)年/ロシアの進出等でアジア情勢が緊迫、通信使はこれで最後となった。
- ・注目ポイント：本書は、貴重な善隣外交の記録として、ユネスコの「世界の記憶」遺産に登録されています。

■資料メモ

將軍名代(上使)・小笠原忠固一行は、対馬を目指し閏2月4日(太陽暦では4月初め)、朝6時過ぎに大津を出発。午前10時ごろ伏見(淀川の川船発着所として有名)に到着しました。一息つく間もなく、すぐ隣の京都から皇族や公家、神社仏閣の名門から次々と挨拶の使者が忠固のもとへやって来ます。伏見奉行を皮切りに宮様や精華家と呼ばれる名門公家など、將軍名代でなければお目にかかれないセレブな面々(の使者)が旅中見舞に訪れました(史料はそのごく一部)。ここでは御馳走船(上使の接待担当大名が一行を大阪へ運ぶ船を手配したことを指す)も出され、手厚く「おもてなし」された様子も記されています。毎日たくさんの人に囲まれて、京は「着だおれ」といいますが、これでは「挨拶だおれ」ですね。

なお、伏見では外にも上加茂社へ代参人を遣わした折の御祓いと御守を頂き、貴布祢社では海難除けの祈祷を受け、伏見出発後は石清水八幡宮(日本三大八幡宮のひとつ)へ代参派遣等々…。一行は人間ばかりか神仏への挨拶も交わしながらの旅を続けたようです。

■整理担当者のつばやき

毎日挨拶尽くして目が回りそう！特に京都は神仏も加わっての挨拶づくしに忠固公も辟易したのではないのでしょうか？(私だったらイヤだな…夢の中でも走り回っていきそうです。)

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・朝鮮通信使応接幕府上使小笠原忠固公 對州御下向海陸日記 文化八年閏二月十九日 至同年七月廿五日 朝鮮通信使を読む会編
- ・ウィキペディア/三十石船無料イラスト

2. 本文の情報は令和4年2月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。
3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.005-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すに当たり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

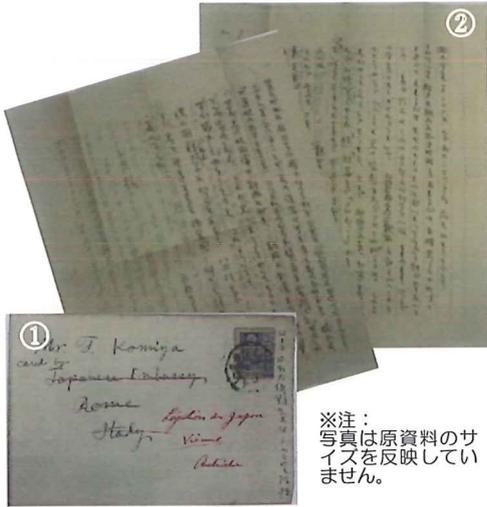
ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 : 安倍能成宛小宮宛書簡（封書）大正 13 年（1924）3 月 7 日・ローマ大使館気付。

■資料のひとことPR: 漱石全集（第 3 次）をめぐる、主張をぶつけあう門弟たちの様子がリアルに描かれています。

■資料写真 : ①便箋 ②書簡（表・裏） ③小宮送別宴図屏風（部分/昭和 19 [1944] 年）



※注：写真は原資料のサイズを反映していません。



（前略）
それから今一つ三重吉が熱心に主張して先生の書画の優秀なものを選び年代にかまひなく各巻に二枚づつ位附し、一篇に書画集なる体裁を具へしめてこの全集のアトラクションとしたといひ、野上賛成、松根異議なく、僕と次郎とは内容の年代に關係あるものを少し位入れるならよし、鈴木説の様な入れ方ハ不賛成。森田も不賛成。寺田さんもどこか穏やかであるまいとの意見、それは初の全集を売るときにはもう二度と全集を（裏へ）買ふ時は外にない様についておきながら、今度は又違ったアトラクションを与えることが前の読者にすまぬと考へられること、校正及び選択の六ヶしきこと。これについても賛否を電報で知せてくれ。（後略）

ついでこのひとくちメモ-史料理解のために「もう一言！」-

この史料は「漱石全集」の編集方針をめぐる門弟たちの「こだわり」ぶりを物語るものですが、その様子を伝える映像までは残されていません。「が」、その様子を彷彿とさせる絵が小宮資料の中にありますので、イメージ参考にご紹介します。この絵は昭和 19 年、小宮を中心に門弟たちが歓談する様子を描いた別の絵なのですが、何となく沸騰する編集会議のように見えませんか？

■資料データ File

- ・形状/材質/法量 : 封書（ローマ日本大使館気付・弐拾銭切手/定型便箋/タテ 23cm*ヨコ 18.5cm）
- ・制作年代/時代背景 : 大正 13（1924）年 3 月 7 日/第 1 回冬季オリンピックシャモニー・モンブラン大会開催
- ・注目ポイント : 渡欧中の小宮に漱石全集編纂（第 3 次）の依頼が舞い込む

■資料メモ

大正 13（1924）年、第 3 次漱石全集の発行が決まりますが、その編集方針をめぐる門弟たちは互いの主張をぶつけあいます。史料はその一端を物語っていますが、このときに欧州留学中の小宮が編集会議に加わることは到底できないことでした。この第 3 次全集の編集主任は漱石門下でも兄貴株として知られた安倍能成が担ったようですが、安倍は初回からの主任である小宮の意見を反映させることに努め、この手紙を通じて小宮の意見を求めました。

この当時 SNS がないことはもちろん、欧州まで手紙が届くのにゆうに 2 ヶ月を要した中であっても、「漱石最愛の弟子」にして編集の要となる「漱石文法」に精通する小宮の意見は不可欠と周囲から認められていたことが分かります。

最終的に「Mr. 漱石全集」ともいべき存在となった小宮の面目躍如たるものがあると同時に、この頃にその萌芽をみることが出来そうです。

■整理担当者のつがやき

この手紙を読むと、漱石全集という「本作り」を通して、我らが師・夏目漱石のことを、多くの人に知ってもらいたいという門弟たちの熱意が伝わってきます。それだけに、こんなに熱い編集会議、入り込んだらヤケドしそうでコワイ…。

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・ウィキペディア-安倍能成について- / 北九州市立文学館 第 19 回特別企画展「没後 99 年 夏目漱石-漱石山房の日々」平成 27 年
- ・新宿区文化産業観光部文化観光課編『ガイドブック 新宿区立漱石山房記念館』新宿区刊 平成 29 年
- 2. 本文の情報は令和 4 年 3 月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。
- 3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。